

昭和39年度

## 冬期合宿報告書

湯俣尾根・赤牛岳

増 瀬 光 弘

今回の冬山合宿については結果的には成功を取めたが、その過程において色々問題も輩出し、まだまだ未熟な点、不徹底な点については今後の踏台として、この報告書の意義を深めたい。

この計画は、長大なコースであつたが、我々がラツシユタクティクスを採つたのは、主にメンバー的なものがあつたからである。

結果は、この方法の長所が最大限に発揮されたと言つても良いと思う。今春の知床に備え、ラツシユタクティクスの基本である迅速で強靱な行動力を身につけることができれば少くとも我々自身に関しては、その資格有りといえる。

### 〔行動記録〕

12月19日 大阪発（21:35 ちくま号）

12月20日、大町着、マイクロバスで七倉まで入るが予定していた軌道が使えず、第五発電所までを考えると睡眠不足の体が増々重くなるような気がする。それでも第五発電所まではわりとスムーズに行けたが、それからは遅々として進まず、重荷は体を締めつけてくる。薄暗くなり始めた頃湯俣へ着く、地面の露出した露天風呂の周りで設営する。地面の上もここ当分は別れとばかり皆むさぼるように寝入ってしまったが、さすが八人用のウインバーは七人を楽な姿勢で収めてくれた。明日の天気も良さそうである。

12月21日 予定通り五時に起床したがついに出発は七時半頃となつてしまった。尾根の取付は晴嵐荘の前を夏道通しに行く、から松、クマザサの中をジグザグに急登は続くが、雪も少なく歩きづらい。やせた岩稜状の尾根を登り切った所で、小さなコルに入つた。この辺りは各種のペナントがあり、夏道もわりと顕著に表われているので楽である。尾根が広くなり始めた所から、吹き溜りになり雪は圧倒的な深さとなり、更に湿った雪はわずか30mほどの高度差をつめるのに20分もかゝつたりする。

広いクマザサの急斜面を登り切り小さな尾根がいくつも現われてくる。大体、中央の尾根を空身でラツセルを続けるが、今日中に湯俣岳までは怪しくなり始めた。暗くなり始めた頃唐松の大本の間にやつと大きなテントを張る。二名が明日のために1時間ほどラツセルをしてきた。

第1日目の登りは本当につらいが、快晴で気分の良い夜である。

12月22日 8時出発、今朝は1時間もおくれた。皆で気合を入れ合つたが心しなければならぬ。昨日のラッセルが効いて気分が良い位稼いだ。

湯俣岳の登りは尾根が途切れた所から、左側に廻り込むようにトラバースをする。廻り切つた所から直登するとひよつこりピークに出た。快晴で眺望は最高である、少し下つた所から急に開けた所へ入り、ペナントに導かれ樹間に入る。大きな唐松の間を気持よく南真砂岳下のコルに下る。

コルから北面の山腹をまくようにして登る。ペナントも少なくなりルートに取り方に気をつける。カンバがまばらに生えた所を尾根筋目指して直登し、やせた尾根から雪壁のようになっていた所を登る。又山腹をまくようにして南真砂岳下の指導標のあるコルへ出た。絶好のテント場である。

2名で偵察を行い残りでテントを張る、今日でやつと遅れを取りもどした感じである。少々湿つぱいがしまつた雪が良かつたのだろう、今日も快晴で気分の良いことおびたゞしい。今日までの行動は天気続きであつた。明日あたり荒れそうな感じである。

12月23日 七時出発、快晴の朝風も弱く南真砂岳まで一気に登る。やつと今日の行程の赤岳の全貌が視界に飛び込んできた、真砂岳まで一気に見通せるが、痩せ尾根はやはり難しく見える。コルまで下り第一のポイントとも云うべきバットレス状の岩稜の前で休み、偵察に精を出す。その結果直登は無理とわり基部より右手の雪面をトラバースすることになった。

小さな尾根上に出て主稜上に出る、そこからは雪のないガレに行くがアイゼンがいかにも鉄の靴のようで歩きづらい。真砂岳の腹を左手にトラバースし、やつと主稜線上に出る。この頃からガスが出始め休む間もなく先を進むが、風とガスはバランスをくずし視界をさえぎり難行する。東沢乗越をこえ最後の登りにかかるが、ルートファインディングとやせた尾根に難渋し、やつと水晶小屋跡に着いた、真暗になつた頃やつと落ちついたが、ほとんど休みもないまゝの10時間の行動はかなりこたえたようだ。天気予報は明日も荒れるだろうと言っているが早くアタックを済ませたい気持が高まつてくる。

12月24日 早朝からガスがひどく、待機していたが七時に停滞と決定、

うまい具合に休養が取れた感で、よく喰い、寝た。たまの停滞も又楽しいものである。

12月25日 起床4時、アタック隊はまだ寝ている、6時テントを飛び出る。素晴らしい天気になりそうである、6時半出発するメンバーは4名チーフ鈴木である。水晶岳のピークに行くのが望見できる。難かしい所は皆無と思うが広い尾根筋と距離の長さが何といつても大きなポイントだ。

11時までにはピークを踏むよう伝えてあるので、全速力を出していることであろう、我々テントキーパーも跡を追って水晶岳まで行く。途中雪壁あり、岩場あり、仲々面白い。大体夏道通しだが雪でかくれて各目のルートファイディングで行く、ピークからは北アの全容がほとんど望まれ、特に槍ヶ岳、薬師岳の圧倒的な山容は目をひく。

## 水 晶 よ り 赤 牛 へ

水 森 洋 一

全く最高の天気、目の冴えるやうな青い空、周囲に白く逞しく輝やく北アの連山、そして南ア、富士、八カ岳、上越の山々のシュリエットが雲海のかなたに島のように浮んでいる。そのシュリエットを追いつながら水晶の頂に腰を下ろしたとき、心はすべてを忘れ果て山に居ることの喜びに満ちあふれていた。この合宿は全くついている、水晶小屋までは東沢乗越でブリザードに苦しめられたのみ、昨日の停滞はアタックに備えての休養を与えてくれ、そしてこの絶好のアタック日和、すべてが我々を歓迎してくれそうだ。

そんな気分になりながら、昼食の「おやつ」をボリボリ口に入れていると下から大きな声が聞えてきた。「こらあ、早よ行きんかあー」新人の杉本と共に遅れて出発してきた増瀬の声だった。いけねえ、のんびりしすぎた、山でゆつくり出来るのは一日の行動が終つたときだけだ。

赤牛への下りは薬師側のクラストした急な斜面である。アイゼンの爪を立てて慎重に下降、右ヘトラバースして稜線に出る、東沢谷側は壁となつて落ち込み大きな雪庇を形成していた。しばらく岩稜が続くがザイルは不用、雪庇に注意

し、目印の赤旗を立てながら前進する。ところどころ雪を冠ったハイマツの上  
を行くが、どうもそんなところは安心して歩けない、ここぞと思つた箇所に足  
を置いたとたん無情にも雪はくずれ去り、腰まで沈んでしまう。アイゼンに密  
生した枝が絡みつき抜け出るのに一苦労だ。

2.742mの三角点附近からはただ広いカレと雪の尾根が赤牛まで続く、ふ  
り返えると水晶の黒々とした山容が高々と目に写る。ヤレヤレ帰りは登るのか  
と思うとうんざりする、しかし締まつた雪、サブザツクにアイゼン足取りは軽  
く赤牛までピッチを上げる。

途中でテルモスを割つてしまう、我々の口に入らぬまゝ暖いコハク色の液体は  
ガラスの破片と共に、白い雪に色だけを残した。割れないテルモスというもの  
があるが、保温性が悪い。両方を兼ね備えたものが出来ないものかをつくづく感  
じさせる。

春山を思わせる強烈な太陽の光線を受けて赤牛頂上に立つ、別に感激はない  
ただ、目標を達成したということが何一つ聞えない静寂の中で心を落ち着かせ  
てくれる。

昼食をしているうちに風が吹き出した、西の空が白くぼんやりとしてきたよう  
だ。しかし今日は荒れることもないだろう、四五枚写真を撮つて女性的な赤牛  
を離れ、黙々と帰途への足を進めた。(以上アタック記録)

全く予定通りの行動にとまどいも覚えるが、目標を達成した気分も又一段で  
ある。しかし、明日からは高嵐尾根の下りである、心して行動しなければならない。

12月26日 昨日に引続き快晴風は強いが雪もよく締り、アイゼンの音が  
心地よい。1日遅れで行動していた同志社のパーティーのフイツクスザイルを  
使わせてもらい、東沢乗越に下る。そこから通称裏銀座コースの夏道を野口五  
郎岳の高嵐尾根側に出る。だだつ広い雪のない尾根を下るが強風とアイゼンの  
締りはこたえる。それでも2.488m点まではすぐ下れたが、左へ折れ気味の  
尾根筋は湯俣側が切れ落ち左手西沢側をまく。

雪の状態は全く悪く、ハイマツ、カンバに足をとられ難行した、2.300mあ  
たりから尾根筋には萎縮した木がモンスターとなつて行手をさえぎっているの

で一つ一つをたたき落さなければならない。やむなく下側へまくが急斜面とくさつた雪で遅々として進まない。

やつと萎縮林を通り抜け下降、トラバースを続け小カン木の間で設営した。天気予報は見通しの暗いことを言っている、明日半日もてばと思う。

12月27日 7時出発、朝から深い雪に難行する、ボソボソと入る雪に登りのように空身のラツセルが続く。地図上でもかなり狭い尾根となり、ルートは一担広げた尾根上に出て又西沢側の唐松の大木の間を進む。

トラバースを続けているうちに、急峻な岩場が表われ行きづまってしまった。どうやら支尾根に入つた様子だ。見通しがきかず次々偵察を行う、その結果支尾根を直登するよりも岩場に沿つて少し登り急な雪面をトラバースする。

樹間ではあるが西沢まで一気に落ちている、慎重にトラバースを続けながら主稜上へ出た。丸い感じのこの尾根を走るようにして下つた、ペナントに導かれながら忠実に主稜上を辿ると第五発電所の池が真下に見える頃には雪も少くなり、ワカコをはづし靴で下る。切り開きをジグザグに下つて導水路の道に出た西沢の河原を吊橋まで行きやつと一息ついた、天気も本格的な崩れを見せ始めみぞれのようなものまで降り出したが、そのまま葛まで一気に歩き通し8時にやつと着いた。

以上のように初めから終りまで計画通りの行動ををすることが出来た。それには第一に天候の異常なほど安定していたこと(1)装備、食糧の整理が良かったこと、又当然ながら毎日の行動が迅速で正確に行なわれたこと等が、大きな理由になつたと思う。(2)ラツキーな面もあつたと思うが中でも食糧装儲の研究、規則的な生活態度が大きな実となることが出来たのは一番の収穫であつた。

個々に見ると装備面では八人用の大型ウインパーは、我々に十分なスペースを与えてくれ余裕とくつろぎが充分得られ、精神的な安定のために大いに役立った。

これによつて夜間、停滞時の休息の重要性が改めて認識させられた。その他ではワイヤブラシなど有効であつたが、グランドシート用のビニールシートはもっと耐寒性のあるものを使用すべきである。他の装備については別に特筆すべきものもないが、おおむね十分なものと思われる。買いそろえるのではなく、

もつと内部的改造を考えるまでにしたいものである。

食糧では特に徹底的に軽量化を図るため乾燥野菜、アルファ米を主としてほとんどインスタント的なものを中心にした。まずくて食べ難いものであるが、これはもつと工夫することによつてある程度解決出来ると思う。

又昼食用として各自がいつも持つようにした「おやつ」は好評で、今後も続けられるだろう。総体的に言えることは、いつもながら献立があまりにも画一的で新鮮味に乏しく、今後一層の工夫が要求される。

今回は荷上げなしなので食糧自体は15日分としたが、主食など余分に携行したので正味20日分位の余裕が出て来た、冬山の原則から云えばこれでも不足であると云うが、計画書にもあるように我々は個々の山行を一つのスポーツ的行動と見るよりも以前にあると思われる人間の本質的、本能的な時点に近ずかんが為にその型態においてエクスペディションを採っている。

現在の日本の山で、探検などもうその余地はないと思われるが、我々はどういった現状の中でも何時か何処かにそれがあるのではないかと思う。

我々にとつてこういった本当に人間的な純粋さを忘れてはならないと信ずる。

- (1) ルートが長丁場であつたが比較的易しかつたこと。
- (2) それにメンバー各自がよく自己を認識し、その任務に忠実だつたとも云える。

良い品を安く売る店

日用品

松本商店

食料品

果物

雑貨

吹田市山手通3丁目23番地